

武田麟太郎全集

武田麟太郎全集

第

五

卷

武田麟太郎全集

第五卷

目次

銀座八丁……………一

續銀座八丁……………一四一

奇麗……………二七一

變化……………二八九

いきほひ……………三〇九

女の環境……………三二九

解説……………三六一

銀座八丁

藤山さん、女の人から電話だよ、とガタビシする古い階段の中途から、下の果物屋の小僧が聲をかけた時、ちやうど彼は鬚をあたり終つたところで、化粧水をヒリヒリする顔に塗り込んでゐた、誰からかな、と考へながら、下りて行つた。——ひよつとすると、バアテンダーの彼と同じく、西銀座の酒場「ロオトンヌ」で働いてゐる女給ののり子からかも知れない、けふは灯がついて店の開くまで、赤坂のホールで一しよに踊らうと約束してあつたのだが、急に都合が悪くなつたのかも知れない。

もうすつかり春になつて了つた、生暖かくて肌は汗ばむほどのいい天気である、明るい色彩に富んだ果物の官能的な香ひが、むうつと若い藤山の鼻を刺した。

「——こちらは、大森の豊田家でございますが」

と、電線を傳つて来る、女中らしい聲が云つた。

のり子ではなかつた、と思ふと同時に、なるほどと、彼は獨りでうなづいたのである。

その待合は「ロオトンヌ」の女主人あき子のよく出入するところで、彼もまた度々彼女に連れられてお伴をしたことがある、——昨夜おそく、もうかんばん、近くになつてから、あき子は誰かに呼びだ

されたとみえ、ちよつと、と云つてそそくさと出かけて行つたが、そのまま歸つて來なかつた、藤山は店のおとじまひをし、唯一つだけ點けた電燈の下で、その日の上り高と照合して傳票を調べ、それを現金と一しよに小さな黒鞆に納めると、新富町の彼女の住居の方へ廻つて見たが、留守番の老婆がひとりゐるだけであつた、こんなことはよくあるので、彼は別に氣にとめず、責任上鞆は預かつて、新橋二丁目の下宿へ戻つたのである。

「——あの、マダムがあなたにすぐこちらへいらしてほしいのださうですが」
聲は續けて云つた。

「ああ、さう——ゐるんですか、他に誰か」

と、彼は念のために聞いてみた。

「——は、あの」

隣寮に相手は返事をして、

「その時、何ですか、鞆も一緒に持つて來て頂きたいつて」

「分りました」と、彼は辯の軍隊口調で、はつきり云つた、——また、勘定が足りなくなつたんだらう、たらしのない話だ、たがさうすると、彼女の方で拂ひをしてやる相手にちがひないが、一體誰だらう、あいつかな、と胸の中でつぶやくのであつた、それにしても、二人がさんざん遊び興じていい

思ひをしたあと始末に、こちらが行かねばならぬなんて、あんまり有難くもない役割だ、と苦笑した、そこで、わざと、ゆつくりしてやれと、

「ぢや、二時間ほどして、伺ひますと云つて下さい、ちよつと先に果す用があるから」

のり子に逢つて、ゆつくり遊んでゐられない事情を話し、少しだけ踊つて行かう、それから大森へ行けばいい、と決めたのである。

すると、豊田家の女中は、あわてて云つた。

「——もしもし、あの大急ぎでお願いしたいんですけど、——實は、マダムがお悪いんで！」

「悪いつて？ 病氣ですか」

「ええ、大へんなのですよ、けさがたから」

——何てことだ、と藤山は舌打ちした、待合で病氣になるなんて！ 彼は、昨夜からそこにゐたであらう相手の男にも、妙に腹立たしい氣持で、洋服を着更へるのであつたが、お洒落なので、なかなか手間どつた。

果物屋から、春の陽ざしの中へ出て來た藤山の姿を、もしも彼をバアテンダーと知らない人が見たら、何ものと思ふだらう。

一分の隙もない青年紳士。

流行のラグランの春外套スプリングコートの下には、英國風に仕立てた淡鼠色ライトグレーの小格子縞を均齊のとれた軍隊歸りの身體にうまく着こなし、同じ系統の縞色のマフラーも落ちついてゐるし、手套と云ひ、ステッキと云ひ、すべてびつたりとしてゐた彼の容姿を——夜ふかしの職業に係らず赤味を帯びた健康さうな頬、太い眉をあげる時冷い光に見開く眼、稍まいかつた鼻も、氣障つぼくまげる口も魅力がないとは云へぬ、幅廣い胸を張り、少しく棄鉢氣味に踏み出す足取りは映畫の影響で、とがめてはならないだらう、——さうした彼の容姿をたすけて、現代的な美を感じさせてゐた。

もちろん、彼が酒場「ロオトヌ」から受取る給料は僅か三十圓で、これに添ふるに毎夜消費される酒の空瓶が自分のものになり、酔狂な客によつては、女たちと同様にチップを呉れたりするが、總收入はどう考へて見ても、これだけの服装をするには不十分なものである、——だから、そこには何かあるのであらう。

藤山はゆつくりと煙草に火をつけながら、流してゐる自動車を物色してゐた。紳士に相應しい良い車を拾はねばならないのである。

京濱國道は混雑してゐた、白つぼいアスファルトは、トラックや自動車、自轉車で充滿してゐて、黒い油のしみ出たタイヤの跡が幾すぢも残つてゐた、警笛や軋む車輪の騒音はぶつかりあつて、人を

いらいらさせた。

鈴ヶ森のガードを少し過ぎて、左側海岸の方へ折れると、急に静かになるのであつた。夜ならば、毒々しいネオンライトで、家の名を大きく屋根の上に出してゐる待合が二三軒立ちならんでゐたが、さすが白晝のことで森閑とした空氣のうちに沈み、眠つてゐるやうであつた、磯の香が春風にはこばれて來た、海には海苔を採る人たちが、のどかに見られた。

豊田家の門から庭づたひに、よく肥えた女中に案内されて、藤山は離れの部屋へ通つたが、途中で、「どうしたんだ」と、たづねた。

「咯血なさつたんですよ、——私たちは最初心中かと思つて大騒ぎしました」

ふんふんと、彼はうなづいた、あき子は前から肺が悪くて、彼が知つてからもさうした経験は幾度もあつたので、そんなら大したことはない、と彼は考へたのである。

しかし、云ふまでもなく部屋の襖を開いた時、彼は急を聞いて驅けつけたといふ狼狽した色と、如何にも心配さうに眼を伏せた神妙な表情とを作つてゐた。

その離れの四疊半は、どういふ意味からか、四壁がちやうど腰の高さ程に鏡がはめこんであつた、だから、あき子の蒲團がいやにけばけばした赤い色をあちらこちらに反射させてゐて、視力を奪はら

とするのであつたが、彼は逸早く男が——黄色いくたくたのレインコートまでも着けたまま寢そべつてゐる男が誰であるかを見極めた。

やはり、あいつであつた。

だが、藤山はそちらの存在は全然無視したやうな冷い態度で、外套を脱ると、あき子の枕許に坐つて、

「どうしたんです、一體」

と、詰問の鋭い響きを、あいつに利かし、彼女の青ざめた額の上にかがむやうにした。

あき子は透きとほるやうな眞白な顔になり、もの憂げに、大きな二重眼瞼を開いたり閉ぢたりしてゐた。

「もういいの、何でもないので」

彼女は云つてから、括れた顔をちよつと突きだすやうに動かして、咽喉の奥の方で微かな咳をした、——普段でも、彼女はそんな力のない咳を、殊に何かおしやべりをした後には必ずしてゐたが、酒場では誰も氣づかなかつた、その咳と兩頬の不自然な赤さ、毛細管の先端まで血の走つてゐるのが分る赤さは、彼女の病氣のしるしであつた、しかし、酒のせゐで小肥りした身體や化粧のために、寧ろ健

康に見られたのである。

「最近は少し飲みすぎましたからな」

と、藤山は堅い表情で云つた、——「御亂行もいい加減にして養生してもらはなくちや」

彼はレインコートを着た男の方へ眼をやつた、その男は、あひかはらず寢そべつたまま、あちらを向いてゐたが、油をつけてない髪の延びた頭に肘をかつて、不興氣に新聞を繰りかへして讀んでゐるのが、いびつな鏡に映つてゐた。

あき子は、胸にあててゐた氷嚢を取り出して、疊の上に置いた、すっかり生暖くなり、氣味悪く、ぐにやぐにやしてゐた。

藤山は、それをつかむと、黙つて立ちあがつた、庭履きを窮屈さうに突っかけて、料理場へ行つたのである、そこで、氷を割つて入れかへながら、女中と二三の會話をした。

「昨夜は随分と酔つて、二時すぎになつて、いらつしやいましたわ、それからまた、お酒なんですもの」

と、女中はあきれたやうに云つた。

苔の生えた古い庭石傳ひに戻つてくると、樹と樹との間に、ちらと動く人影があつた、それは急ぎ足に出口の方へ行つて了つたが、あのレインコートの男にちがひなかつた。

部屋に入ると、想像にたがはず、果して彼の持つて来た黒靴は開かれてあつた、傳票はばらばらになつて枕許にちらばつてゐた、——やはりあいつに金を呉れてやつたのである。

あき子は、すぐ新富町へ歸りたい、と云ひだした、寢臺車を呼んでくれ、それから、気がついて見ると、寢巻も買つて来てもらはねばならぬ、ここのを着て歸れないから、と云ふのであつた。

「大丈夫ですか、そんなこととして、——もう暫く、靜かにしてゐた方がよかないかな」と、藤山は危ぶんだ。

「大丈夫、クラウヂンを二本注射したんだし、すつかりとまつてしまつたやうだから」

ぢや、せめて暗くなるまで、ここにゐませう、それに晝日中ぢやいくら何でも、恰好もつかないし、と皮肉をまじへたつもりで、彼は云つた。

「駄目」

さう云ひきつて、あき子は、ハンドバッグから小さな手帳を取りださせた。——そこには、日々の彼女の豫定、彼女の所謂「ランデヴ」の表が簡単な符號で記されてあつた、午飯は誰とどこで、それから誰と逢つて映畫を見に行く、次に、といつた風に手際よく時間を無駄なく區切り、酒場に来る客の誘ひに應じてゐるのであつた、けふの男たちは待ち呆けを食ふわけである。

「五時頃、内田に資生堂で逢ふことになつてるの、——けふ、お金貰ふ約束なんだけど、まさか、こ

とへ呼ぶわけにもいかなしね、だから、どうしても歸らなくちやいけないわ、その時分電話して、病氣だから、住居の方へ来て下さいつて、云つて頂戴」

と、咳をしたり、痰をはいたりしてはきれぎれに云つた。

——内田といふのは、彼女のパトロンで貴族であつた。

その内田が、赤玉のオランダチーズと果物籠とを携へて、新富町へ来たのは、五時をほんの少し過ぎた頃であつた。

「何故、もつと早く知らせてくれなかつたのです」

彼らしい叮嚀な言葉つきで、柔和に云つた、そして、三十五にしては生えあがり、艶々しく光つてゐる額や、和服の袖の中まで、手帛でにじみ出た汗をぬぐふのであつた。

ちやうど一時間前に、あき子と藤山は、やつとのことで、大森から戻つたのである。馴染の家でも併りるのが彼女は嫌ひで、今まで一度もそんなことはしなかつたが、その時は結局診察料薬代などは立て替へてもらはねばならなかつた。そこで、銀座のお店の方はよく存じてをりますから、といふ豊田家に、わざわざ住居の所在も教へて来たのであつた、——それから、擔ぎ込まれた彼女に、すつかりうろたへて了つた婆やを促して、取り敢ずかかりつけの町醫者を呼び、薬瓶なども枕許に取りそろ